

令和元年度（平成 31 年度）
絶滅危惧種保全・外来種防除対策事業
（外来種侵入状況調査）
報告書

令和 2 年 3 月

山形県環境エネルギー部みどり自然課
受託研究受入先：国立大学法人山形大学
（文責：江成広斗・高田真大朗）

はじめに

特定外来生物に指定されているアライグマの侵入、およびそれに伴う農業・生活被害の発生は山形県を含む東北地方において限定的であるものの、徐々に拡大傾向にある（詳細は昨年度の同報告書を参照）。そのため、体系的な情報集約は外来哺乳類の予防的対応に必要である。

そこで本調査は、昨年度に引き続き、山形県内でアライグマの分布が懸念される高畠町と米沢市（事前調査によりアライグマ生息情報があった地域）を対象に、広域的なアライグマの分布状況を明らかにすることを目的に計画された。なお昨年度は鶴岡市と最上町の2市町を対象として同調査を実施しているため、その結果は昨年度の同報告書を参照されたい。なお、昨年度と同様に、アライグマと同じ外来性中型食肉目であるハクビシンの分布状況について、本調査でも補足的に評価した（写真1）。

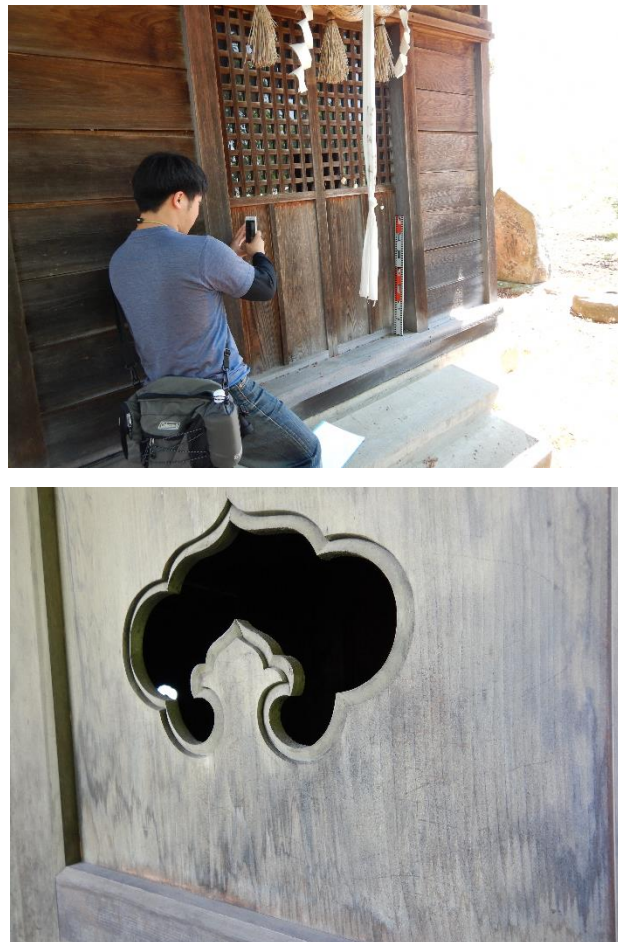


写真1 痕跡調査の様子（上：記録風景、下：侵入の際に残した爪痕）

方 法

調査方法は昨年度と同じである。アライグマと、比較対象種としたハクビシンの分布調査を実施するために、高畠町と米沢市の全域を 1km メッシュに区分し、当該種の在・不在を評価した。各メッシュ内に位置する 2 個所の社寺仏閣を痕跡調査の対象とし、アライグマ・ハクビシンの爪痕の有無を記録した。なお、社寺仏閣が一つもないメッシュは調査対象から除外した。社寺仏閣が 1 か所しかないメッシュはその 1 か所のみを調査対象とした。また、木造ではない社寺仏閣や、社寺仏閣がトタンなどで囲まれている場合、さらには建物が何らかの理由で原形をとどめていない場合は調査対象から除外した。その結果、調査対象は高畠町で 57 の神社（メッシュ総数 45）、米沢市で 101 の神社（メッシュ総数 79）となった（図 1）。

社寺仏閣などの木造建築物に、対象 2 種が侵入した場合、木柱などに爪痕が残る。足の形態から、アライグマは幅約 5 cm 程度の 5 本の爪痕、ハクビシンは幅 5 cm 以下の 4 本の爪痕が残るため、両種間の判別は可能であることが知られている。ただし、柱の低い位置にはネコ等のその他の動物の爪痕や、爪痕形状が不鮮明なものもしばしばみられた。そこで、木造建築物の高さ 1 m 以上の個所に、アライグマもしくはハクビシンの明瞭な爪痕が残っていたもののみを「在」として採用した。

これらの調査は、高畠町において 2019 年 5 月 15 日、6 月 5 日、12 日、9 月 21 日の 4 日間、米沢市において 6 月 14 日、7 月 8 日、26 日、9 月 21 日、29 日、10 月 3 日、21 日の 7 日間で実施した。

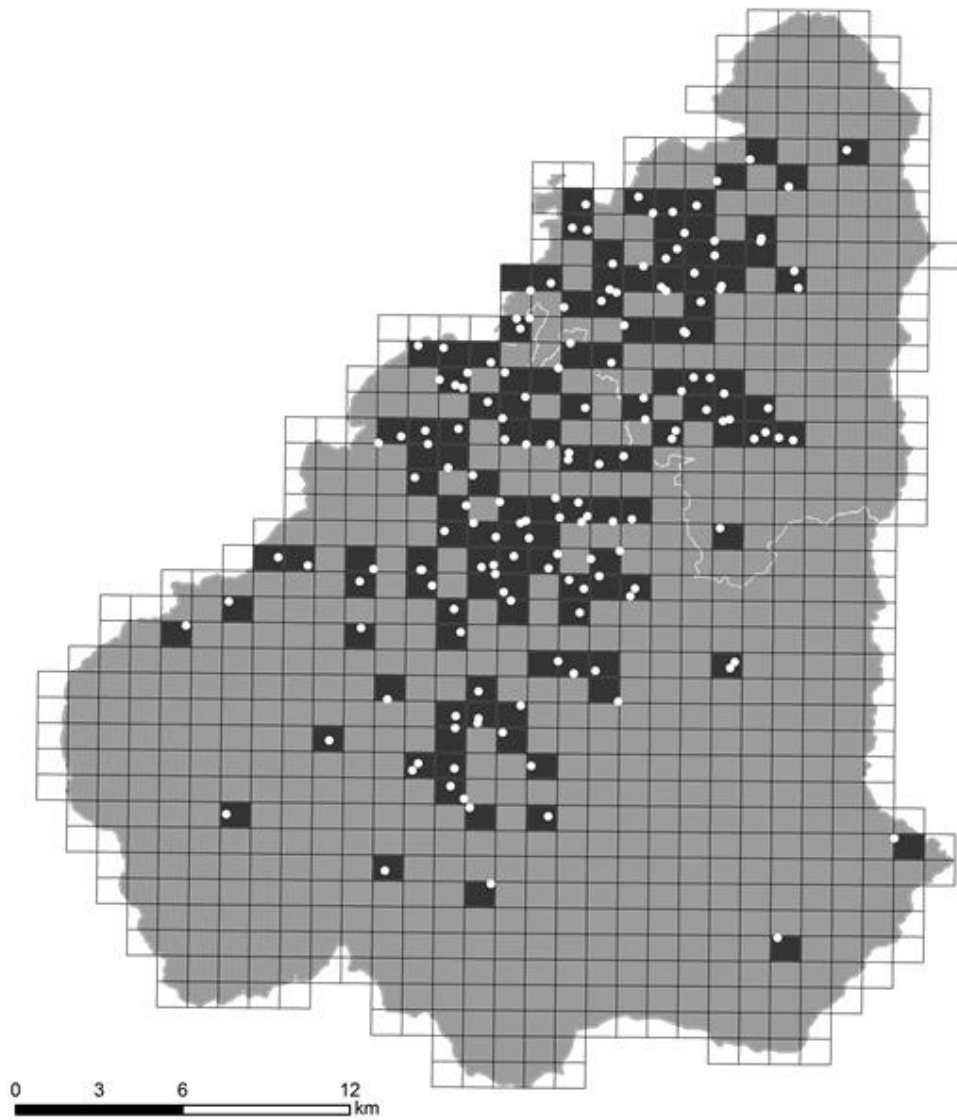


図1 高畠町および米沢市で痕跡記録調査を実施した神社の配置
(1 kmの黒色メッシュが調査メッシュ。白点は調査対象の神社)

結 果

調査対象のうち、両市町ともに7割を超えるメッシュでハクビシンによる爪痕を確認した（表 1）。一方で、それに比べると数は少ないものの、両市町でアライグマの痕跡が確認され、その総数は18メッシュとなった（写真2）。両市町において、アライグマの痕跡は市街地にある社寺仏閣に集中する傾向があり（図 2）、ほぼ全域で見られたハクビシンとは異なる傾向であった（図 3）。

表 1 対象2市町で確認された痕跡ありメッシュ数の総数と割合
（カッコ内数値はその割合%）

| | 高畠町 | 米沢市 |
|--------------------|-----------|-----------|
| アライグマ 痕跡ありメッシュ数 | 10 (22.2) | 8 (10.3) |
| ハクビシン 痕跡ありメッシュ数 | 42 (93.3) | 60 (76.9) |
| 調査メッシュ数 | 45 | 78 |



写真2 米沢市で確認されたアライグマのものとみられる柱につけられた泥のついた手の跡

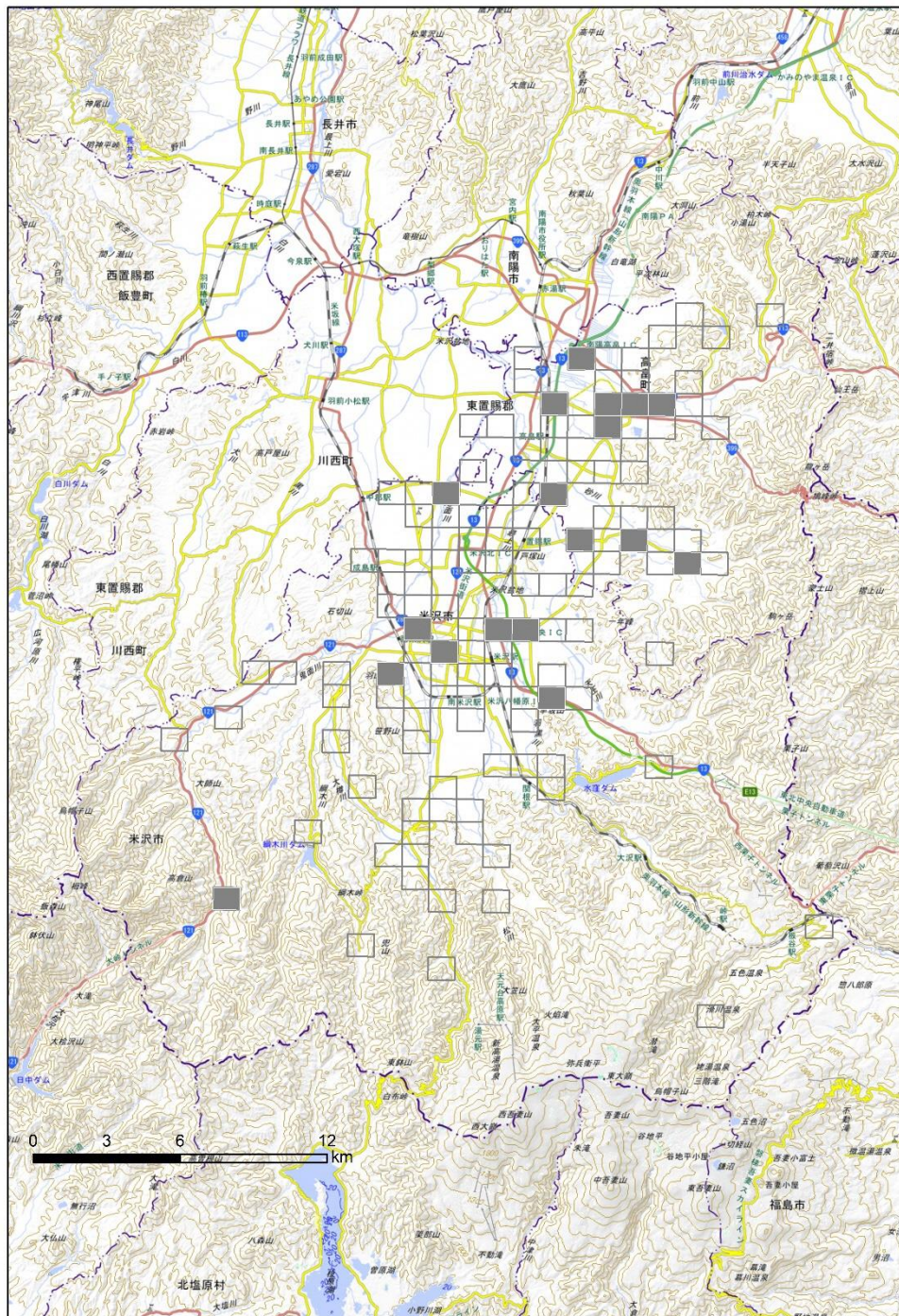


図2 高島町・米沢市でアライグマの痕跡が確認されたメッシュ
(灰色メッシュ=痕跡あり、無色メッシュ=痕跡なし)

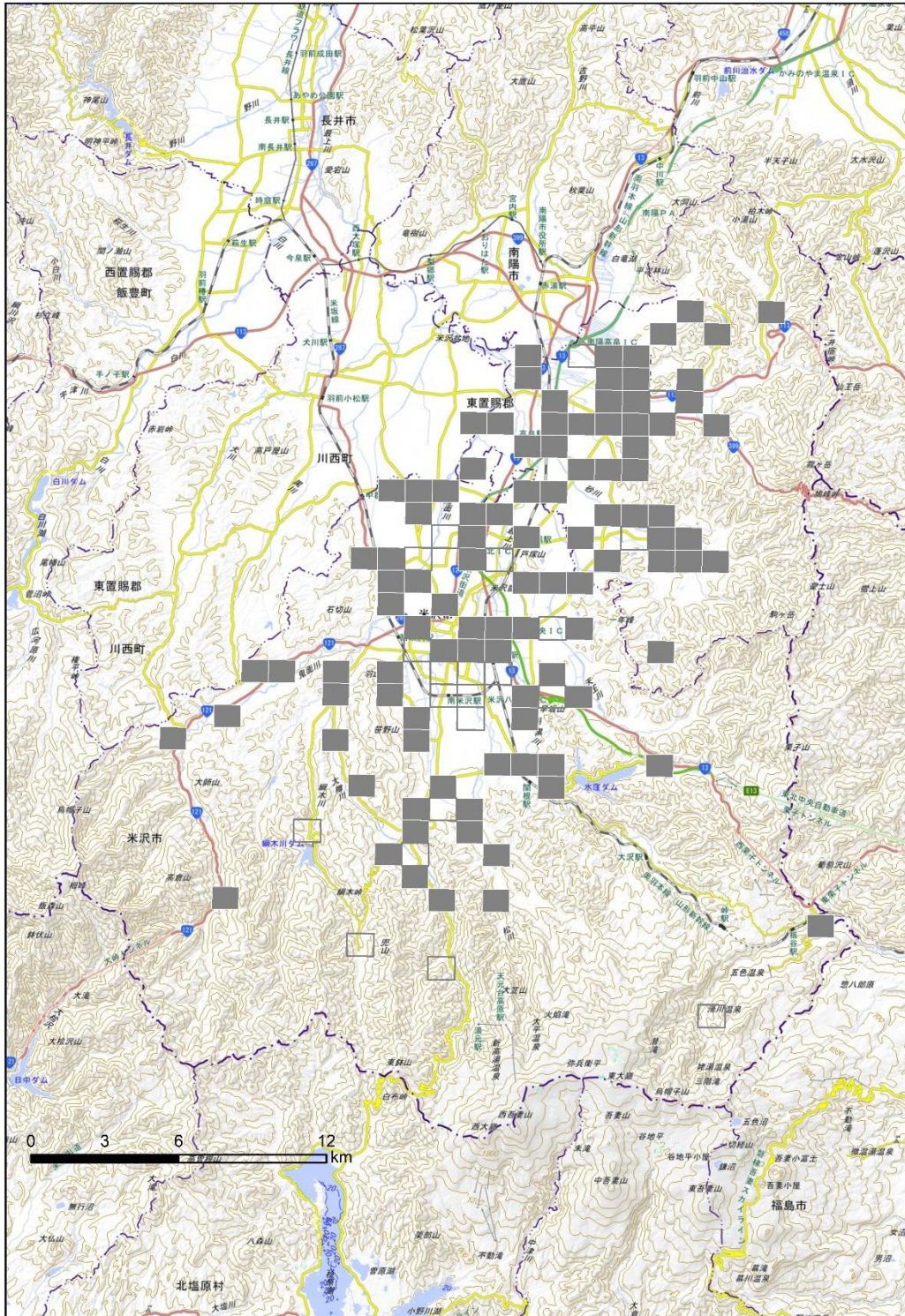


図3 高島町・米沢市でハクビシンの痕跡が確認されたメッシュ
(灰色メッシュ=痕跡あり、無色メッシュ=痕跡なし)

考 察

高畠町・米沢市で実施した本年度の調査結果は、鶴岡市・最上町を対象にした昨年度の調査結果とほぼ類似した傾向を示している。すなわち、(1) ハクビシンは面的に分布拡大させほぼ全域に広がっている、(2) アライグマは局所的に分布し、分布は市街地に偏っている、という点である。こうした結果は、昨年度の報告書に示した仮説「ハクビシンは自然繁殖に伴う個体数増加によって分布を広げているのに対し、アライグマは何らかの理由で人為的に持ち込まれた結果、現在の偏った分布を構築している」を支持するものである。

「山形県内にはアライグマはほぼ生息していない」という理解がこれまで一般的であった。しかし、2年間の調査を通して、少なくとも一度は侵入した痕跡を持つ地域が市街地を中心に散見されることが明白となった。昨年度の報告書でも述べたように、「一度侵入・定着を許し、繁殖増加段階（個体群動態で「増加相」と定義される段階）に入ると、現在の捕獲技術でも効果的にそれを抑え込むことは極めて難しい」という認識をあらためて共有すべきである。写真2で示した極めて新しいアライグマの足跡を除き、本調査で採用した痕跡評価は、一度は侵入したという「過去の事実」を明らかにするだけであり、現在も分布しているか否かまではわからない。痕跡が確認された社寺仏閣を対象に、カメラトラップなどを持ちいた現況評価を進めることが予防的なアライグマ対策には重要である。